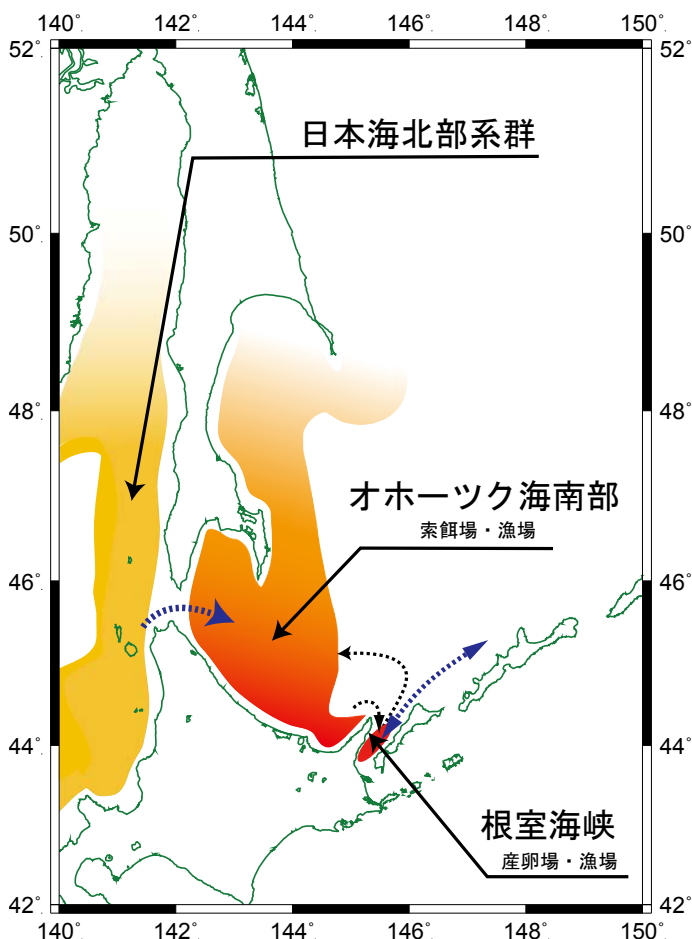




スケットウダラオホーツク海南部 平成27年度資源評価結果

1

分布・回遊・漁業



分布・回遊

- 日本水域では索餌回遊群が主体で、産卵生態は不明
- 成長の異なる群が存在し、他海域(日本海・根室海峡など)との交流が想定される
- 4月に分布する仔稚魚は日本海から移送される

漁業特性

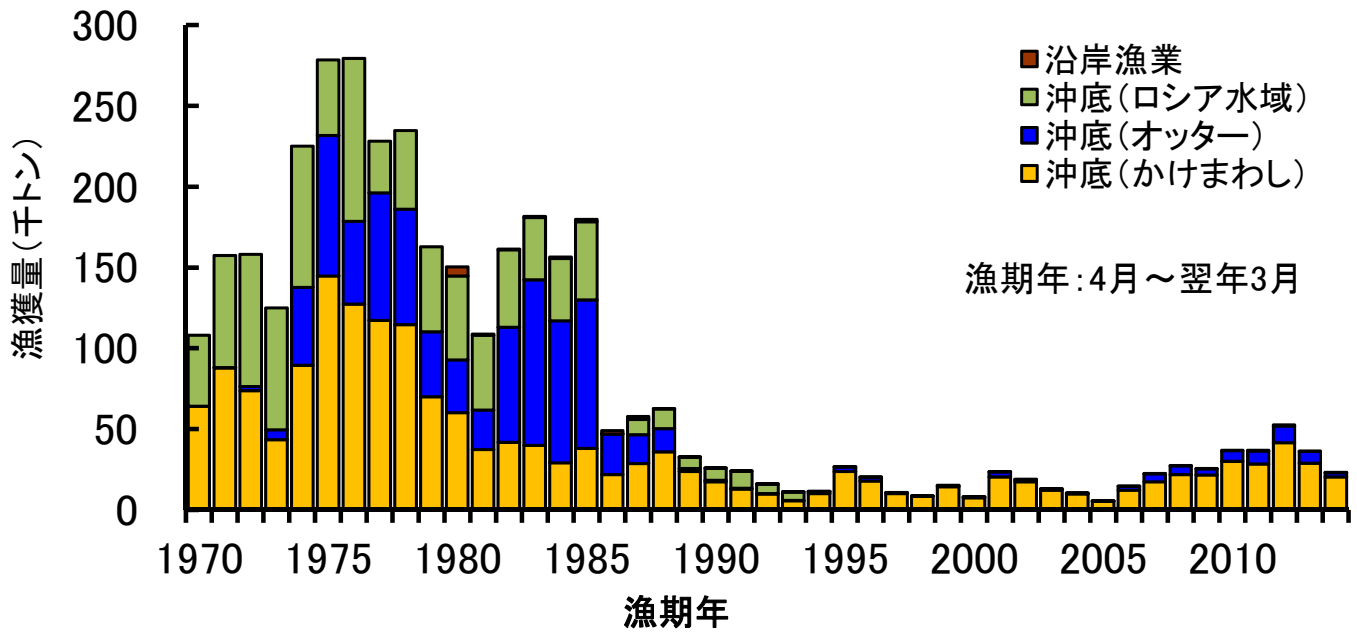
- 漁期: 4~7月主体(周年操業)
- 漁法: 沖底主体(かけまわし)
- 沿岸漁業の漁獲は少ない

その他

- 隣接海域ではロシアが漁獲
- TAC管理を実施

2

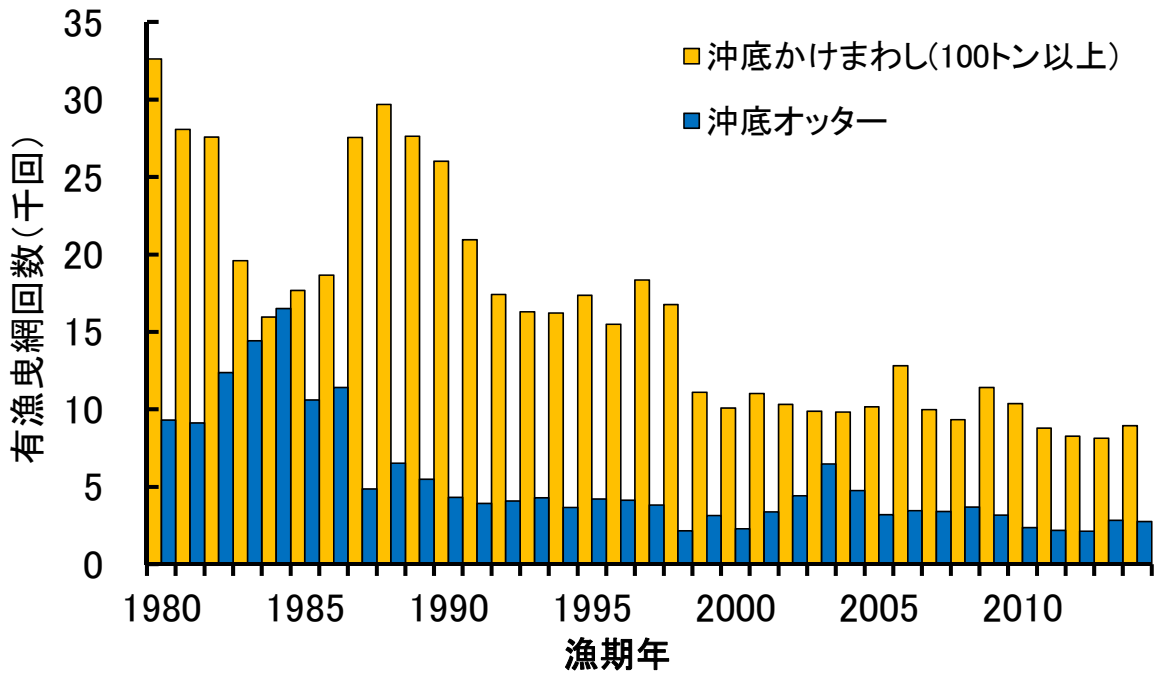
漁獲量の推移



- 1972年にオッターコントロールが導入され漁獲量は増加
- ソ連(ロシア)の規制に合わせて漁獲量は大きく減少
- 1989年以降の減少は、資源減少以外の要因を含む
- 近年の漁獲主体は沖底のかけまわし
- 2014年漁期の漁獲量は2.3万トンで2009年漁期並み

3

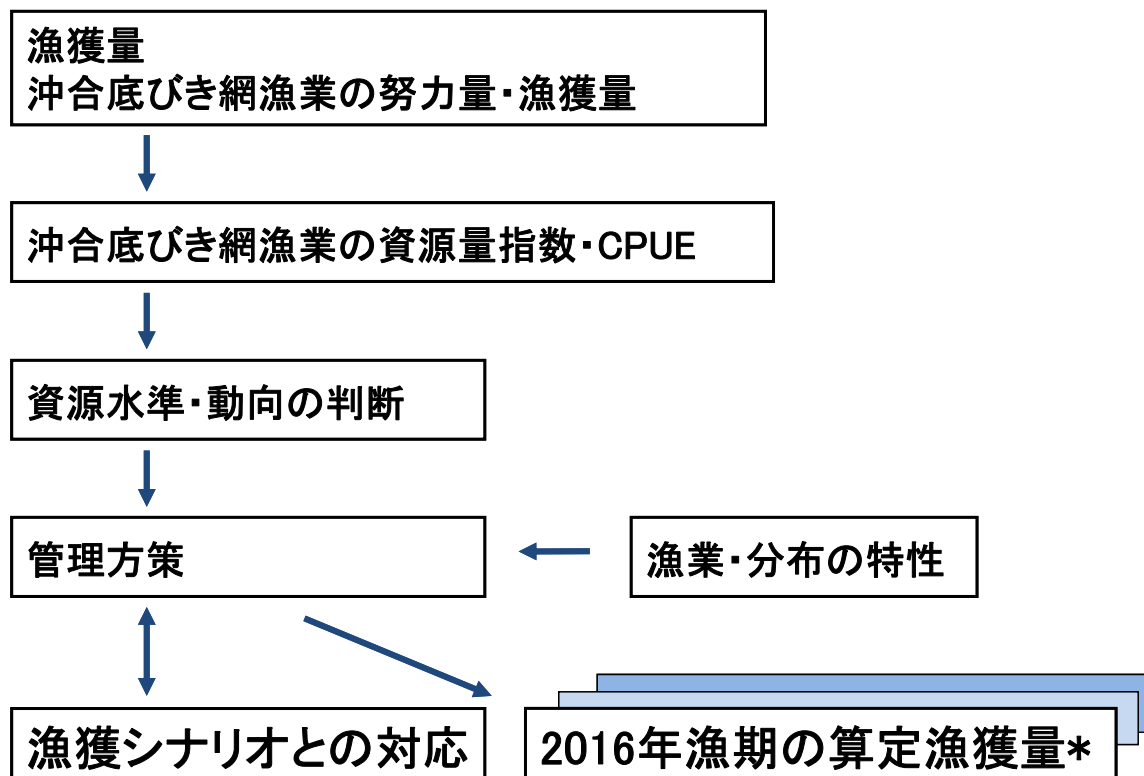
漁獲努力量の推移(沖底)



- 2014年漁期の沖底許可隻数は15隻(1985年:80隻、1987年:41隻)
- オッターコントロールの網数は1999年漁期以降は3千網前後で推移
- かけまわしの網数は1999年漁期以降は10千網前後で推移

4

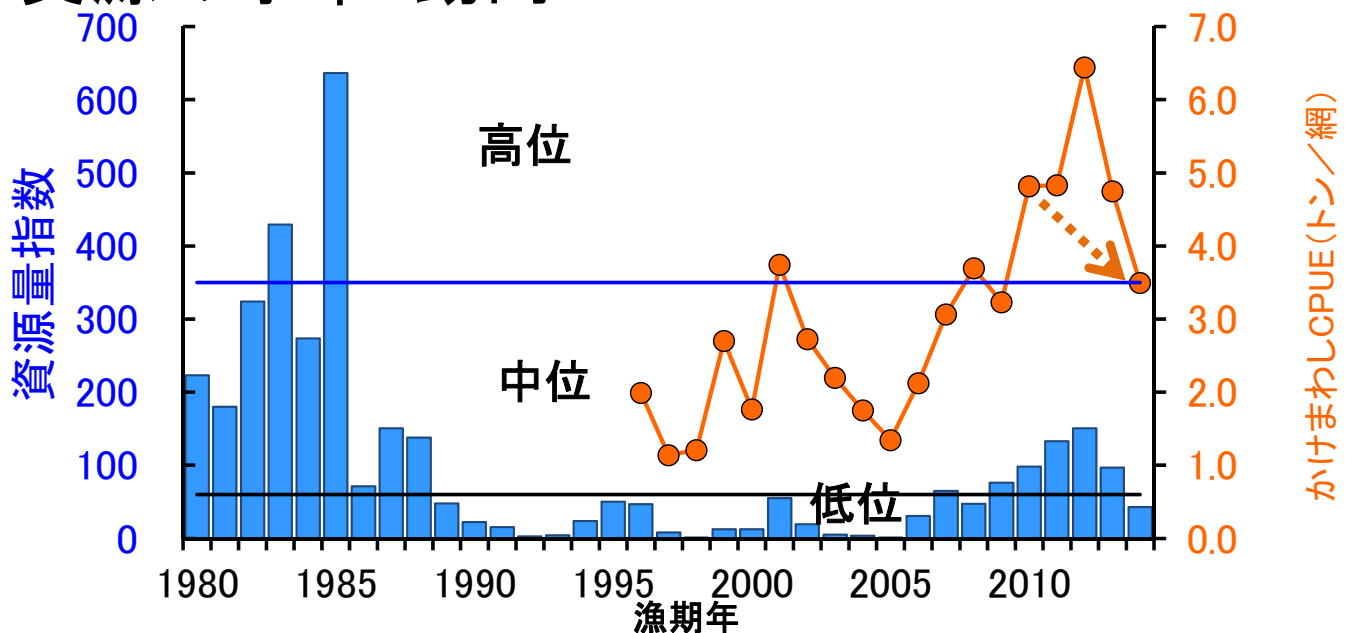
資源評価の流れ



*分布範囲がロシア水域にまたがっており資源量やF値等の算定が困難であるため、ABC算定規則2-1)を準用し算定漁獲量を設定

5

資源の水準・動向



- 水準は、オッタートロールの資源量指数から判断
 - 低位水準: 60未満(1989~2006年漁期の最大値をもとに設定)
 - 高位水準: 350以上(1980~1985年漁期の平均値をもとに設定)
- 2014年漁期は43で低位水準に該当
- 動向は、かけまわしCPUEの2010~2014年漁期の推移より推定
- 2014年漁期は2010年漁期を下回ることから減少と判断

6

資源評価のまとめと2016年漁期漁獲量の算定方法

- 資源評価のまとめ
 - 資源水準は低位で、動向は減少(昨年漁期: 中位・増加)
 - 資源の主体は来遊群であり、現状では主産卵場も日本水域には形成されていない
 - 日本水域の資源豊度は、来遊状況によって大きく変化する可能性が高い
- 算定漁獲量
 - ABC算定規則 2-1)
 - $ABC_{limit} = \delta_1 \times Ct \times \gamma_1 = 1.0 \cdot Cave_{3-yr} \cdot 0.70$
 $\delta_1: 1.0$ 、 Ct : 2012~2014年漁期の平均漁獲量 ($Cave_{3-yr}$)
 $\gamma_1 = 1 + k(b/I)$ 、 b と I は資源量指標値(かけまわしCPUE)の傾きと平均値(2012~2014年漁期)、 k は係数で規則2-1)の標準値1.0
- 管理基準
 - 資源の状態に合わせた漁獲

7

2016年漁期算定漁獲量

漁獲シナリオ (管理基準)	Limit/ Target	F値 ($F_{current}$ との 比較)	漁獲 割合 (%)	将来漁獲量 (千トン)		確率評価(%)		2016年漁期 算定漁獲量 (千トン)
資源の状態に合 わせた漁獲 ($1.0 \cdot Cave_{3-yr} \cdot 0.70$)	Limit	—	—	—	—	—	—	26.2
	Target	—	—	—	—	—	—	20.9

8